RENPOUDO
WINTER
COLLECTION

師走優遊

奥田連峯堂

奥田連峯堂

TEL:075-561-3655

FAX:075-525-1148

営業時間：11時 - 18時

定休日：毎週水曜

〒605-0073 京都市東山区祇園町北側244

https://www.renpoudo.com

✉ renpoudo@mth.biglobe.ne.jp

HPはこちら

１．

仁清写笛掛花入

永楽 即全（16代 永楽善五郎）

共箱
即中斎書付
昭和 - 平成
径2.5cm　高さ39cm

笛の形を模した掛花入です。
金具は中川浄益によるものです。

花入の高台に永楽印があります。
箱の蓋の裏に、茶道 表千家の即中斎の書付があります。
箱の裏には即全の署名と浄益の署名があります。

２．

均窯方壷

楠部 彌弌

共箱
昭和
口径8cm　胴径16cm　高さ25.5cm

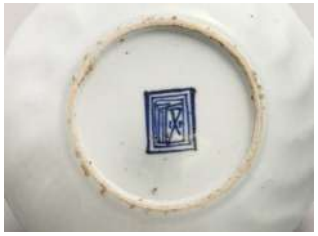
楠部彌弌が均窯の壷を模して制作した壷です。
均窯（きんよう）は、釣窯とも言い、中国　河南省に位置する、白濁した美しい発色のあ青磁を焼成した古窯、またはその特徴的な釉薬のことです。
均窯の青磁は、北宋から金、元時代にわたって長期間焼成されました。
鉄分を含んだ胎土を用いて、成形はろくろや型抜きで厚めに行われました。
均窯の特徴は釉薬にあります。色調によって月白釉（げっぱくゆう）、澱青釉（でんせいゆう）などと呼ばれることもあります。

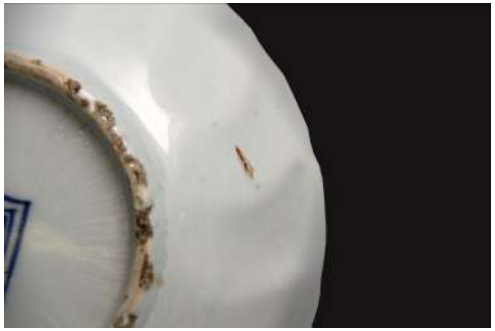
３．

祥瑞　捻文五寸皿　10客組

中国 明時代（17世紀）
径16cm　高さ4cm

祥瑞は、一般的に中国 明時代末期 崇偵年間（1628 – 1644）頃を中心に日本からの注文により江西・景徳鎮の民窯で焼かれた染付磁器のことで、日本での呼び名です。古染付に比べて、上質な胎土と顔料を使い、端正な形に丁寧に文様を書き込んでいます。祥瑞という名の由来は、一説には、一部の作品の銘文に「五良大甫 呉祥瑞造」と書かれていることにあります。これは「呉」家の五男の家の長男である「祥瑞」が造ったと言われています。
縁にニュウが1客、縁にホツが1客、高台にホツが1客、窯キズが1客あります。





４．

花扁壷

河井 寛次郎

河井つね極箱
昭和
口径10.8cm　胴径20.5cm×13cm　高さ20.4cm

大正から昭和の時代、民藝運動の中心的役割を担った陶工 河井寛次郎の作品です。
口の形は四角形で、胴は大変ユニークな形をしています。
胴の両面に伸びやかな筆致で花文様が描かれています。
寛次郎の妻 つねが箱書きをしています。
高台にソゲがあります。

５．

青磁草花図鉢

河井 寛次郎

共箱
昭和
径21cm　高さ5.8cm

細かな貫入が全体に入り、真ん中には筒描きの技法で、草花図が描かれています。
縁や高台周りは、鉄釉で茶色に施釉されています。
「河井寛次郎展　山本為三郎コレクション（大山崎山荘美術館）」図録に類似品が掲載されています。

６．

草花図壷

河井 寛次郎

共箱
大正
口径7cm　胴径9.5cm　高さ10.5cm

大変小ぶりな壷です。
胴には、濃い色味で、草花が描かれています。
高台内に「寛」の銘があります。

７．

掛合釉指描扁壷

濱田 庄司

共箱
昭和
人間国宝
口径3.5cm×2.8cm　胴径15cm×8.5cm　高さ22cm

黒釉の上から白釉が掛けられ、その上から指描きの技法を用いて文様が描かがれています。
指で文様を描いた作品は濱田庄司の代表的な技法のひとつと言えます。単純ですが、ひとつとして同じ模様にならないという偶然性の魅力があります。

反対側

８.

黄釉線描大鉢

舩木 研兒

共箱
昭和 - 平成
径39.5cm　高さ8.5cm

本作はスリップウェアの技法を用いた作品です。
大変大きな作品で、迫力があり、飾り映えすると思います。

島根県松江市の宍道湖畔に舩木窯はあります。江戸時代より170年の歴史を持ち、その五代目である舩木研兒は、早くから父・道忠を手伝いながら、浜田庄司やバーナード・リーチより学びました。

９．

鐵鉛釉茶碗

舩木 研兒

共箱
昭和 － 平成
口径9.8cm　高さ9.5cm

島根県布志名の陶芸家 舩木研兒によるお茶碗です。
温かみのある黄色の発色のお茶碗です。
見込みは光沢のある質感です。

１０．

青白磁刻線格子文合子

バーナード・リーチ

共箱
1961（昭和36）年
径5cm　高さ5.8cm

白みの強い青白磁の小さな合子（蓋付の容器）です。側面には格子状に彫った模様があります。箱書きより1961年（74歳）に制作されたことがわかります。本体の下の方にBLの銘があります。蓋の真ん中に窯キズがあります。「バーナード・リーチ～英国の代表作に見る」図録に類似品が掲載されています。

リーチは、香港生まれの英国人です。幼少期は日本で過ごし、その後、英国に帰国しました。そして、日本への憧れから再来日しました。一緒に英国で窯を築いた濱田庄司をはじめ、柳宗悦、河井寛次郎、富本憲吉などと交流し、同志として民芸運動にも参加し、影響を与えました。

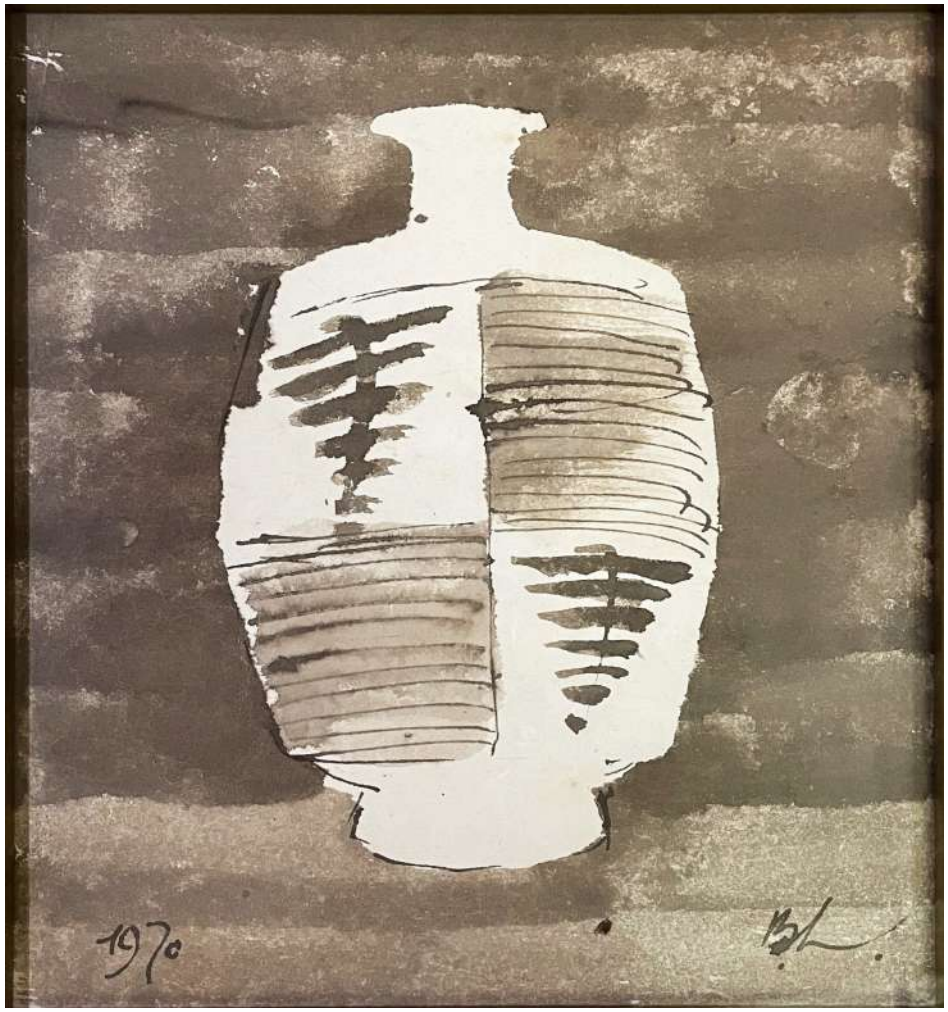
１１．

額　素描　扁壷図

バーナード・リーチ

紙本肉筆
1970（昭和45）年
額のサイズ：縦48cm　横46cm

左下に1970と書かれていることから、1970年（83歳）に制作されたことがわかります。
「バーナード・リーチ～英国の代表作に見る」図録に類似品が掲載されています。
来日当初は、英国でエッチングを学んでいたこともあり、エッチングの指導をしていました。



１２．

ペルシア三彩水禽文鉢

加藤 卓男

共箱
昭和 - 平成
人間国宝
径22.2cm　高さ5.8cm

加藤卓男は、ペルシア陶器を研究し、ラスター彩の復元をはじめ、青釉、三彩、ペルシア色絵を復元しました。
見込みには鳥が7羽描かれており、三彩釉が中心に向かって流れている様子が見られます。

１３．

備前旅枕掛花入

金重 陶陽

共箱
昭和
人間国宝
口径4cm　胴径9.5cm　高さ14cm

本作は中国の青磁筒花生を原型とし、旅先で寝る時に用いる枕を連想させるため「旅枕」と称されている花入です。金具が付いており、掛けても、置いてもご使用できます。底に「ト」の彫銘があります。

陶陽は、岡山県出身で、備前の陶工として初めて人間国宝となりました。備前焼を再興させることに成功し、備前焼中興の祖と称されます。北大路魯山人やイサム・ノグチらとも親交がありました。

１４．

黄地紅彩皿額

加藤 土師萌

共箱
昭和
人間国宝
額：40.5cm×40.5cm

作者の加藤 土師萌（かとう はじめ）は、多様な作風をの作品を残しています。本作品で用いられている黄地紅彩の技法は中国の古陶磁に見られるの技法です。加藤土師萌は、昭和36年には人間国宝に認定を受けています。

額が収められているタトウとは別に、元々お皿が収められていた共箱が有ります。それには、「昭和丙申秋」と箱書きが有ります。
※昭和丙申：1956（昭和31）年

１５．

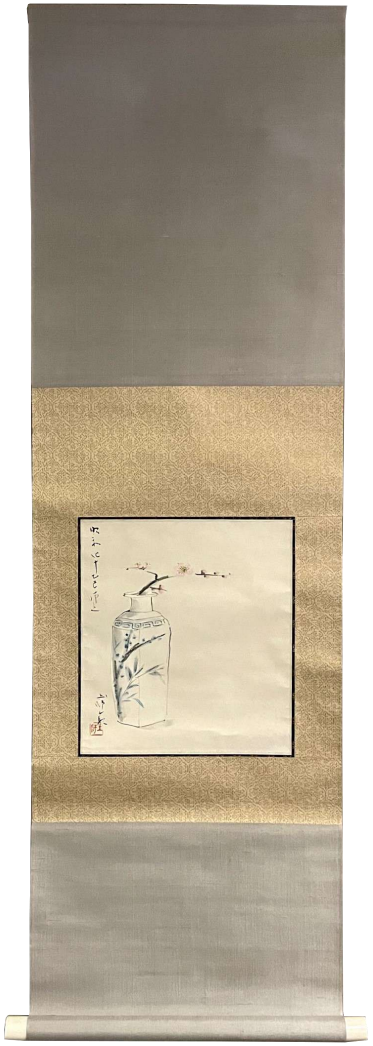
梅一枝図幅

加藤 土師萌

紙本
共箱
昭和
人間国宝
幅34.5cm　長さ115cm

梅を生けた花瓶が描かれた掛軸です。
左上に「昭和四十乙巳師走」と書かれ、左下には土師萌（はじめ）のサインがあります。
加藤土師萌は最初、画家を志していたこともあり、図案科で図案を学んでいます。

加藤土師萌は、色絵磁器で人間国宝に認定された陶芸家で、富本憲吉と共に色絵磁器の双璧と言われました。東京芸術大学教授、日本工芸会の理事長を務めました。



１６．

乾山写寄向付　10客組

9代 白井 半七

共箱
昭和
八橋：径11.5cm　高さ5.5cm　　水仙：11径cm　　高さ7.5cm
桜狩：径11cm　　高さ7.5cm　　龍田川：径12cm 高さ5.6cm
菊寿：径11.8cm　高さ5.6cm　　梅　：径9.8cm　高さ7cm
秋草：径10.5cm　高さ8cm　　雪松：径10.5cm 高さ7.5cm
貝合：径16cm×10cm　高さ3cm　　開扇：径17.5cm×12.5cm　高さ2.4cm

白井半七は、江戸時代より続いた陶芸家の名前です。
初めのころは今戸焼と呼ばれる瓦器に施釉した楽焼風の軟陶を
制作したり、今戸人形を制作したりして隆盛しました。
8代白井半七の時に、小林一三の招きによって兵庫県に
移窯しました。9代半七は先代8代と共に、吉兆の湯木貞一氏と
親交が深く、吉兆の器も多く作っていたと言われます。
梅や貝合わせに汚れが見られます。
10客の向付とは別に緑釉の掛かった小碗が付いています。

１７．

螺皿　5客組

10代 楽 旦入

共箱
江戸時代
幅14.5cm×19cm　高さ5.5cm

巻貝形の向付です。箱には螺皿（にしざら）と書かれています。
三つ足になっています。
3客の足に直しがあります。

１８．

染付捻中皿　10客組

永楽 妙全（14代 永楽善五郎）

共箱
大正 - 昭和
径14.5cm　高さ3.9cm

染付の濃淡で内外に螺旋状の捻文が表わされています。

永楽妙全は、夫の得全没後、14代 永楽善五郎を名乗り家業を継続させました。その後、19年間、永楽家を支え、16代 善五郎（即全）を養育もしました。

１９．

染付網絵だし注　10客組

永楽 即全（16代 永楽善五郎）

共箱
昭和 - 平成
径6cm 高さ6cm

内側と外側に染付で網目が描かれています。

２０．

笙蒔絵硯箱

幕末明治頃
径22cm×24.2cm　高さ5cm

蓋の表には笙（しょう）が蒔絵されています。
笙は、日本の伝統文化である雅楽で用いられる
楽器のひとつです。
束ねている帯と呼ばれる部分は銀製で作られています。
笙の下部分には松と鶴が細かく蒔絵されています。
蓋の裏側には霞がかった月が蒔絵されています。
墨と筆が付いています。

２１．

倶利平棗

藤川 蘭斎

共箱
明治 - 大正
径7.6cm　高さ5.5cm

倶利とは屈輪とも書き、堆彫に好んで用いられた渦状の蕨手に似た曲輪模様のことです。
この文様は、漆を数十～百回あまり塗り重ねて適当な厚さにした漆層に刀で浮彫状に表したものです。
彫漆と呼ばれ、本作では、その漆に色漆を用いており、漆の層により色が違っています。
高台には蘭斎の号である「文綺堂」の彫銘が有ります。
箱の甲書きには「倶理彫　平棗」と書かれています。

藤川蘭斎は、讃岐漆芸の基礎を確立した玉楮象谷の甥にあたり、その技法を受け継いだ1人です。

２２．

立雛図幅

松村 景文

絹本
共箱
江戸時代
幅55cm長さ191cm

立雛は紙雛という別名を持ちます。紙で作った人形を川に流して厄払いをしたことが立雛の起源となっています。
袴や着物には亀甲文様や松が描かれています。
全体的にシミやシワが多いです。

松村景文は、江戸後期の四条派の画家で、
呉春の弟子です。

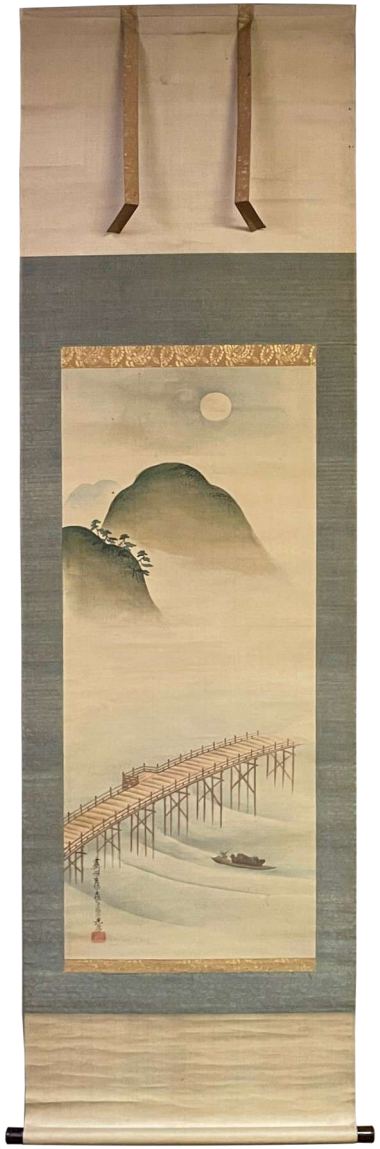
２３．

宇治橋図幅

土佐 光孚

絹本
江戸時代
幅46.5cm　長さ178cm

遠くに山端が見えその上には月が描かれています。手前には宇治橋と、その下には舟が描かれています。
土佐派は日本的な大和絵の技法を樹立し、室町時代より朝廷の絵所を代々世襲しました。桃山時代に一度衰退しますが、江戸時代になり再興しました。
本紙にはシミが見られます。表装には折れ、シワ、小さな虫喰い穴が見られます。



２４．

額　板絵　観音

芹澤 銈介

肉筆板絵
共シール
昭和
人間国宝
額：縦27.3cm　横21cm

板に肉筆で観音様が描かれた小ぶりの額です。
芹澤は、人物、花や鳥、手仕事、風景、歴史上の出来事、現代小説の一場面に至るまで様々なジャンルを見事に表現しています。その中でも仏教的なテーマも扱いました。
本作もそのテーマのひとつになります。
裏側に「銈介　せ」のサインがあります。

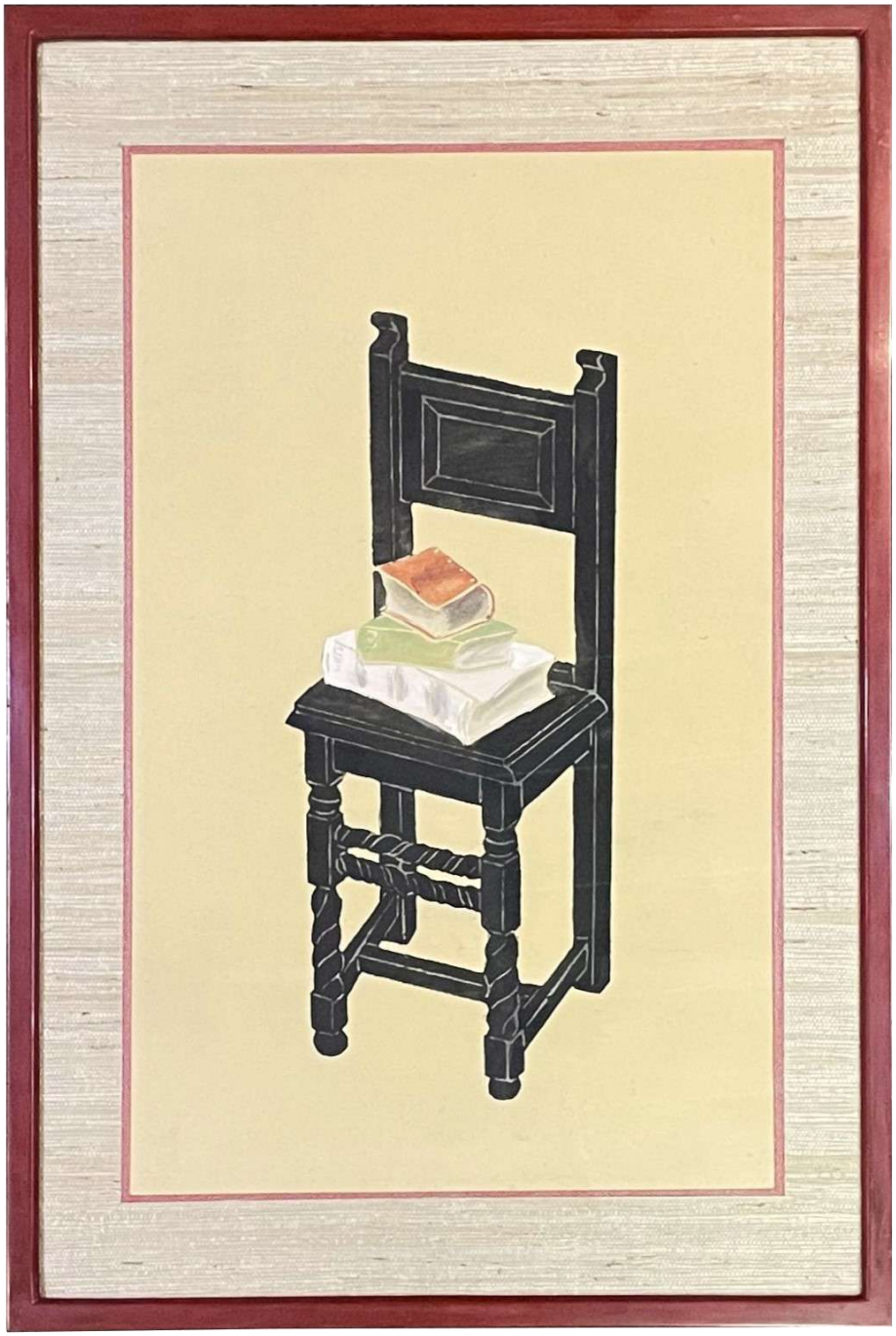
２５．

額　型絵染　古書と椅子

芹澤 銈介

紙本
共シール
昭和
人間国宝
額：縦63cm　横42cm

芹澤銈介は、収集家としても著名で、静岡にある芹沢銈介美術館には4,500点に及ぶ世界の工芸品が収蔵されています。
家具のなかでも芹沢が好んだのが椅子だったようです。ヨーロッパやアフリカの椅子を中心に、多数の椅子を集め、常に取り替えながら身辺に置いていたそうです。本作品で描かれている椅子もお気に入りの椅子の一つなのかもしれません。
額に少し傷みがあります。



２６．

額　龍膽の柵

棟方 志功

棟方巴里爾 鑑定証
棟方志功鑑定委員会 鑑定登録証
1957（昭和32）年
額：縦52cm　横45cm

桑山も躅飛（しょくひ）の院も秋ならむ
その裾山の竜胆（りんどう）咲けるや

桑山はその福光町の中心部から北東約2.5キロほどのところにある標高293メートルの山で、志功が愛した山です。その山頂には桑山神社があります。躅飛の院は、富山県南砺市（旧福光町）にある光徳寺のことです。光徳寺境内に赤御影石でこちらの歌碑が建てられています。

作家略歴（五十音順）

永楽 即全（16代 永楽善五郎）
1917（大正6）年 - 1998（平成10）年
14代得全の甥15代正全の子。妙全の養嗣子。三井家・三千家に出入りし数々の名品を作る。茶道隆盛と共に現代の名工の一人に数えられる。

永楽 妙全（14代 永楽善五郎）
1852（嘉永5）年 - 1927（昭和2）年
京都の女性陶芸家。本名は悠。夫は永楽得全（14代）。技量に優れ作品への評価は高い。

加藤 土師萌
1900（明治33）年 - 1968（昭和43）年
愛知県瀬戸生まれ。本名一（はじめ）。陶芸図案家から作陶に進み、岐阜県陶磁器試験場の技師となるかたわら、帝展工芸部に入選を重ねて注目される。横浜市日吉に築窯して陶芸に専念、戦後は日展や日本工芸会で活躍。1961年、色絵磁器の人間国宝に認定。

金重 陶陽
1896（明治29）年 - 1967（昭和42）年
岡山県生まれ。備前焼名家、六家の一つ金重家の長男として父楳陽のもとで修業を積んだ。40歳前後に細工師から脱皮して桃山時代の備前焼（古備前）を手本とした茶陶備前に転じ、重厚、入念、豪放な作行きの茶具づくりに成功し、現代備前焼の再興の祖として、そのニュー・リーダーとなった。56年（昭和31）に「備前焼」の重要無形文化財保持者に認定された。

河井 寛次郎
1890（明治23）年 - 1966（昭和41）年
島根県生まれ。東京高等工業学校窯業科卒後、京都市陶磁器試験場に入所。京都市五条坂に窯を築き作陶を行う。東洋古陶磁の技法による作品を制作していたが、民藝運動に関わり、実用を意識した作品に取り組むようになる。文化勲章、人間国宝、芸術院会員への推薦を辞退。

楠部 彌弌
1897（明治30）年 - 1984（昭和59）年
染付、青磁、鈞窯、仁清風など、作風は多技多彩。彩埏と名付けた釉下彩磁は独自のものである。また京焼の伝統を踏まえた色絵は優美と言われる。帝展や日展などで活躍。昭和53年、文化勲章受章。

加藤 卓男
1917（大正6 ）年 - 2005（平成17）年
岐阜県多治見市生まれ。父 5代加藤幸兵衛に師事。古代ペルシア陶器の斬新な色彩や独創的な造形、釉調に魅力を感じ、西アジアでの長年の発掘研究を経て、滅び去った幻の名陶ラスター彩の復元をはじめ、青釉、三彩、ペルシア色絵など、高い芸術性を持つ異民族の文化と日本文化との融合に成功。平成7年に人間国宝に認定。

9代 白井 半七
1928（昭和3）年 - 1987（昭和62）年
京都芸術大学卒業後、8代と同様に乾山写を得意とし、その他にも、独自の作風の茶陶も製している。昭和55年、兵庫県三田市大原に移窯。8代と共に料亭「吉兆」と親交を深めており、茶道具や会席の器など「吉兆好」の作品をよく残した。

芹澤 銈介
1895（明治28）年 - 1984（昭和59）年
静岡市生まれ。東京高等学校図案科卒業後、生涯の師である柳宗悦と沖縄の染物紅型に出会ったことにより型染めを中心とした道に進む。1956年、人間国宝に認定。

土佐 光孚
1780（安永9）年 - 1852（嘉永5）年
土佐分家光貞の子。幼名は虎若丸。字は子正。鶴皐と号した。御菌玄審頭の三男を養子にしたという。禁裏絵所を勤め、嘉永 5 年(1852)正四位下に叙せられた。寛政度内裏では幼少ながら父と共に清涼殿に障壁画を描き、文政元年(1818)には大嘗会悠紀主基屏風を描いた。『平安人物志』文化十年版から嘉永五年版まで登場し、寺町丸太町に住んだ。墓は知恩寺(京都市東山区)にある。

濱田 庄司
1894（明治27）年 - 1978（昭和53）年
神奈川県生まれ。東京高等工業学校（現東京工業大学）窯業科に入学、板谷波山に師事。同校を卒業後は、河井寛次郎と共に京都市立陶芸試験場にて主に釉薬の研究を行う。この頃、柳宗悦、富本憲吉、バーナード・リーチの知遇を得る。大正9年、イギリスに帰国するリーチに同行、共同してセント・アイヴスに築窯。大正13年、帰国し、沖縄　壺屋窯などで学び、その後、栃木県益子町で作陶を開始。昭和30年、人間国宝に認定。

バーナードリーチ
1887（明治20）年 - 1979（昭和54）年
香港生まれ。幼年は日本で過ごし、帰英後はロンドンでエッチングなどを学ぶ。1909年に再来日し、六代尾形乾山に弟子入りして陶芸の道を歩む。その後、柳宗悦、富本憲吉や志賀直哉ら白樺派同人と交友して日本の芸術の新しい動向に触れ、美術や陶磁器への関心を高めた。1920年、浜田庄司を伴って帰英、浜田と共に日本風の窯を築き、スリップウェアの研究と復活に努めた。1934年、再び来日し、益子や東京、布志名などの窯を巡り製作を。柳宗悦、河井寛次郎等と共に民藝の普及に尽力し、海外でも講演を行い、国際的な陶芸家の第一人者となる。

藤川 蘭斎
天保11（1840）年 - 大正4（1915）年
藤川黒斎の子。本名を新造という。文綺堂2代を継ぐ。明治18（1885）年五品共進会に食卓、広器、懐石膳具、重箱、茶箱などを初出品し評価を得る。宮内省買上げなど。

舩木 研兒
1927（昭和2）年 - 2015（平成27年）
江戸時代より170年の歴史を持つ布志名焼窯元 舩木家に生まれる。濱田庄司に師事し、その後、日本民芸館賞、現代日本陶芸展やサロン・ド・プランタン奨学賞を受賞する。昭和28年には、琉球政府の招聘により渡琉、作陶している。リーチの窯場にて研修。これを機に、スリップウェアと呼ばれる英国で17-18世紀頃に盛んに作られた化粧泥で模様をほどこした品物に魅せられ、この技法を本格的に取り入れる。日本に戻り、各展覧会に出品し受賞。

松村 景文
1779（安永8 ）年 - 1843（天保14）年
四条派の絵師。京都の人。呉春の異母弟で、彼に画を学んだ。兄といっても呉春とは親子ほど年齢が離れている。四条に住んで、妙法院に出仕した。花鳥画を得意とし、「墨色の美麗なるは兄に勝る所あり」とも言われた。兄のあとを継いで四条派の隆盛をもたらした。

棟方 志功
1903（明治36）年 - 1975（昭和50）年
20世紀の美術を代表する世界的巨匠の一人。日本の板画家。青森県出身。昭和17年以降、彼は版画を「板画」と称し、木版の特徴を生かした作品を一貫して作り続けた。

10代 樂 旦入
1795（寛政7）年 - 1854（安政元）年
了入の次男として生まれた。文化8年、十代吉左衛門を襲名。弘化2年、剃髪隠居して旦入と号す。文政2年よりたびたび紀州へ下り、紀州徳川10代治寶侯、11代斉順侯の御庭焼きである偕楽園窯、清寧軒窯に奉仕。

Memo